

日本の産業発展のしわ寄せを一手に引き受けた犬島・豊島。犬島は煙害対策として本土から銅の製錬所が移設され、その後産業の後退とともに忘れられた島だった。豊島は、都市生活や工場から出た産業廃棄物を不法投棄され、島民の健康被害と深刻な土壌汚染を招いた。島民たちは立ち上がり、2000年の公害調停まで25年間、住民の重ねた島の寄り合いや会合は6千回を超えたという。メディアでも大きく報道され、この豊島の住民運動をご存知の方も多であろう。この不法投棄廃棄物の処理にあたり、実に当学会との関係も深い。

その島たちが、今、美しい瀬戸内海の自然と調和する元の姿に戻りつつある。新しい価値をつくり出すという「共創」の理念のもと、瀬戸内国際芸術祭をきっかけに、世界各国から観光客がこの地を訪れている。過去の負の遺産を未来に見失わない、過去と未来の共生を試みる旅のかたちを紹介する。

◆犬島（岡山県岡山市）の光と影

国崎クリーンセンター啓発施設 所長

鈴木 榮一

1. 島の繁栄

犬島といえば、今や瀬戸内芸術祭の拠点の一つとして「犬島精錬所美術館」が話題であるが、100年ほど前の明治期から大正初期にかけては、大規模な採石や製錬により島全体が工業地として繁栄を極めていた(写真1)。しかし製錬所閉鎖(1919(大正8)年)以降は世帯数や島民数も年々減少し、昭和に入り化学工場が建設されてもち直した時期もあったが、衰退の一途をたどっている¹⁾。

2. 影の記憶

明治末期頃の瀬戸内海の島々は、鉱業プラントの建設ラッシュにわいていた。本土から、煙害等の公害をもたらず施設が、人里離れた瀬戸内海へと次々にやってきたのである。犬島も、帯江鉱山(現在・岡山県倉敷市)にあった製錬工場を、煙害対策として1909(明治42)年に犬島

へ移設したもので、大阪築港(1897(明治30)年頃)の犬島における大規模採石事業²⁾で建設された港湾施設を利用し、採石後の頑丈な地盤の上に建設した。そして1913(大正2)年、当時の財閥・藤田組がこれを買収し、西日本最大級の銅製錬工場へ拡張するのであった。

しかしながら、抜本的な煙害対策がないのだから、島民はたまったものではない。記録によると、製錬所は地元との間で2度にわたって煙害賠償契約や協定を結んでいる。また閉鎖後は地元で煙害未解決通告書を交付している。閉鎖後に犬島製錬所の設備等を手に入れた譲渡先(住友総本店)が再操業を果たしえなかったのは、煙害対応の困難からではないだろうか。

昭和に入って誕生した化学工場について



写真1 大正期の犬島製錬所(手前は発電所)
(※藤田組の後身であるDOWAホールディングス(株)(旧名:同和鉱業株式会社)所蔵資料)

での確証はないが、雑誌の記事「備前犬島・公害が問題にできない条件」(毎日グラフ1965年9月26日号)から察するに、1965(昭和40)年当時においても、公害とは縁が切れなかったようである。

ちなみに、この記事で紹介された化学工場は1969(昭和42)年に閉鎖され、現在犬島で操業中の化学工場とは、企業も製造内容も全く異なるものである。

3. 明日への期待

2008(平成20)年犬島精錬所美術館の誕生を契機に、犬島「家プロジェクト」やシーサイド犬島ギャラリーなどが加わり、犬島は新しい時代を迎えている。瀬戸内国際芸術祭(福武財団)の効果も絶

大で、来島者も多くなり、芸術関係者が都会から移住するまでに至っている³⁾。

中でも注目される犬島精錬所美術館は、製錬所の遺構を保存・再生した美術館で、環境に負荷を与えない^{さんぶいち}三分一博志の建築と、三島由紀夫をモチーフにした柳幸典の作品で構成され、「遺産、建築、アート、環境」による循環型社会を意識したプロジェクトだという⁴⁾。

アートの島へ変容しつつある島の姿に「犬島の輝く明日」を予感しつつ、この現代アートによる素晴らしい取り組みが、けっして未来の芸術遺産とならぬように、輝き続けてほしいと願うものである。

参考文献

- 1) 鈴木榮一：犬島製錬所の盛衰、犬島の石嫁ぎ先発見の旅犬島ものがたり、犬島再発見の会、pp.104-125 平成22年1月(2010)
- 2) 大阪市築港事務所：大阪築港誌、pp.214-247(1906)
- 3) 北川フラム、福武總一郎：直島から瀬戸内国際芸術祭へ 美術が地域を変えた、現代企画室、pp.58-123(2016)
- 4) 犬島精錬所美術館・公式HP <http://benesse-artsite.jp/art/seirensiho.html>